

# 平安京左京三条三坊十三町跡

## 発掘調査成果の概要

— 現地説明会資料 —

所在地 京都市中京区烏丸三条上る場之町604

調査主体 (財)京都市埋蔵文化財研究所

調査期間 1991.09.03～1992.06.15

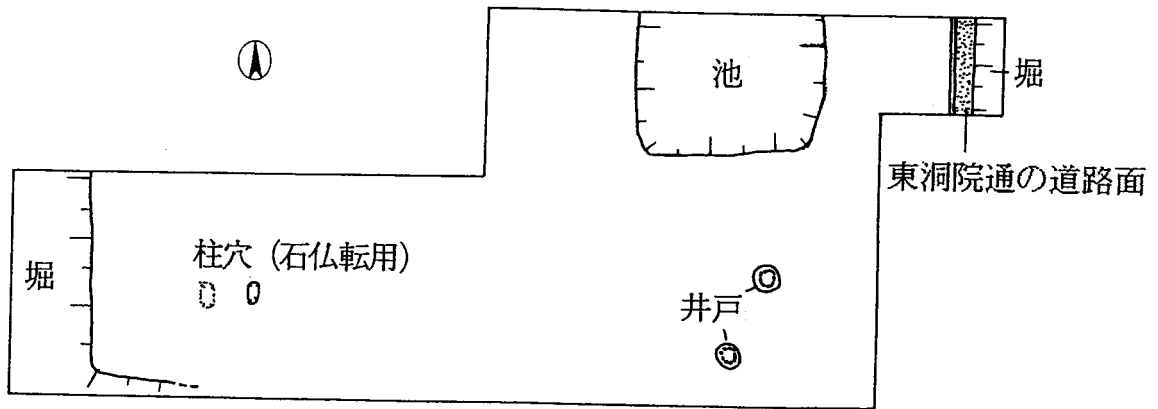
調査面積 約1300m<sup>2</sup>

1) 今回の調査では平安時代から江戸時代にわたる多数の遺構を検出することができました。なかでも、室町時代に属する遺跡は、当時の宅地ならびに宅地内の状況を具体的に示す一例として我々の眼前に姿を現した考古資料であり、中世京都ならびに庭園研究史上欠くことのできない新たな資料を呈示できたと考えています。

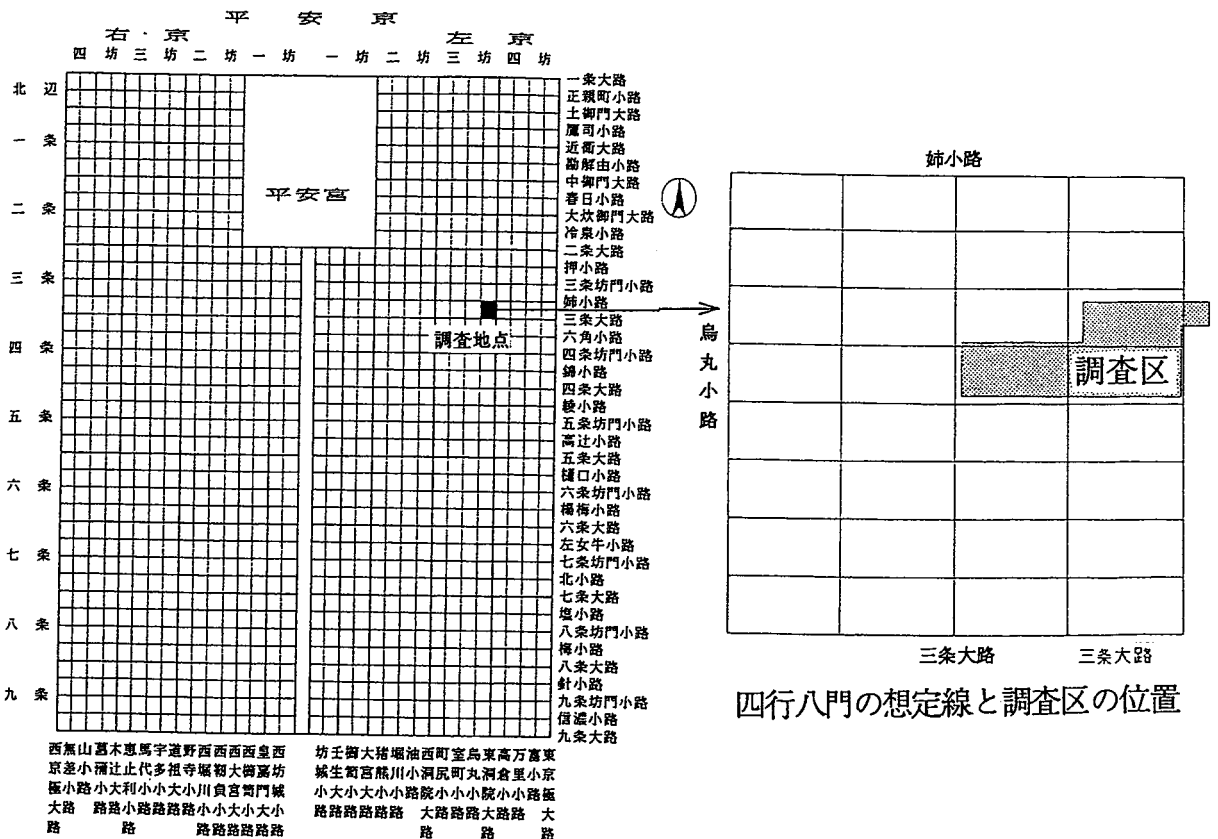
調査では次に示したような成果が得られましたが、現在はまだまだ未整理の状態ですので、主要な遺跡の概略を記しておきます。それぞれ重要な情報を含むものです。

平安時代	遺構	井戸など
	遺物	軒瓦など
	備考	東三条内裏跡 (平安京左京三条三坊十三町)
室町時代	遺構	池・堀・東洞院通・井戸・柱穴など
	遺物	瓦器・輸入陶磁器など
	備考	邸宅内の庭園跡
江戸時代	遺構	池・建物・柱列・通路・井戸・土壇など
	遺物	陶磁器・輸入陶磁器・木製品・軒瓦など
	備考	後藤庄三郎邸跡

京都は平安京造営以後一貫して華やかな都市生活が営まれてきた訳ではなく、都市の持つ構造的な諸問題や多くの戦乱・災害の中で激しく変貌を遂げて現在に至っています。今回検出した室町期の遺構群を年表の中に当てはめれば、おおよそ応仁の乱前後の時期に該当します。この頃、社寺を始め有力な武家・公家から町組に至るまで防御施設として総じて構を構築します。当該地の土地利用については不明な点が多く、今回の調査で検出した構ならびに構の中に構築された池および出土遺物は、この地域における利用・活動状況を考察する上で重要な遺跡になろうと考えています。



室町時代の主要遺構概略図 (1/500)



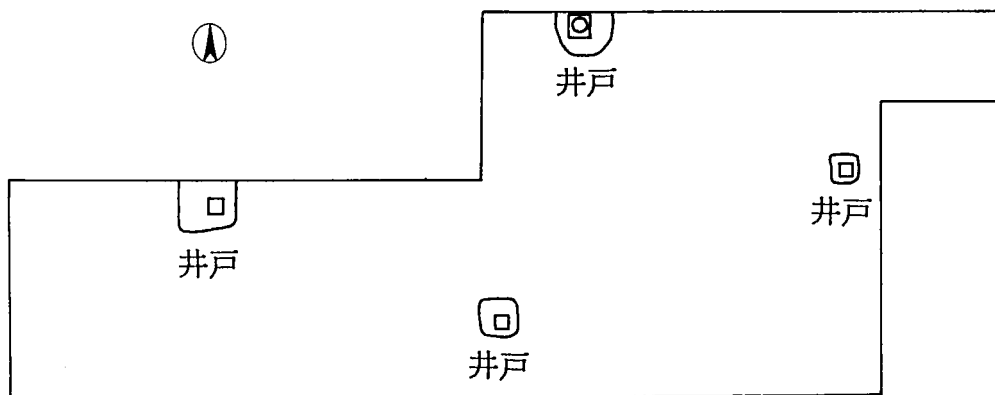
2) まず、平安時代の遺跡について話を進めましょう。

平安京は現在の市街地にはほぼ重なる地域に位置します。今の地図で示しますと、おおよそ北は一条通・南は九条通・東は寺町通・西は天神川に囲まれた、南北約5.2km・東西約4.8kmの広大な都です。平安京内の住所は条（南北方向の空間の名称＝北辺から九条）・坊（東西方向の空間の名称＝一坊から四坊）・町（各路に囲まれた空間＝住空間）であらわします。

この場所を平安京の呼称で示せば、平安京左京三条三坊十三町となり、北は姉小路・東は東洞院大路・南は三条大路・西は烏丸小路に面しています。この方一町（約120m四方）の敷地は代々藤原氏の邸宅が営まれ、その後白河・鳥羽上皇に譲られ、院政期の御所として使われました。ここに皆さんもご存じの寝殿造の建物や池をともなう庭園などがありました。

調査では、残念ながら寝殿造にともなう遺構は検出できませんでした。寝殿造の邸宅では、正殿の南庭は儀式を行う重要な場であり、調査区はこの南庭に当たっているのかも知れません。しかし、当時の様相を彷彿とさせる遺構が調査区の中央北端で検出できました。井戸です。この井戸は下半が円形縦板組（展示遺物・径84cm）、上半が方形縦板組（一辺120cm）というこれまでに類例のない井戸です。円形縦板組の各部材は下面がほぼ水平で、ホゾ穴に木を差し込み連結し外周に縄を巡らせて楔を打ち込んでいることから、上部で組まれたのち井戸底部に据えられたと考えられます。なお、この井戸の掘形から井籠組の井戸部材が出土しました。この部材は一本が長さ210cm・幅30cm・厚さ7cmという巨大なものです。これらの状況を総合しますと、平安時代前期の井籠組井戸跡の上へ平安時代後期に新たに上記の井戸を構築したものと考えられます。

この他、3箇所ですべて平安時代後期から鎌倉時代にかけての井戸を検出しています。これらの井戸は方形縦板組の井戸側を有していました。



平安時代の主要遺構概略図 (1/500)

3) 次に、室町時代の主要遺構の概説を述べます。当該期の遺構には東洞院通・堀・池・溝・井戸・柱穴・土塋跡などがあります。

東洞院通――平安時代の東洞院大路（路幅約24m）に該当します。東洞院通は現在の通り（路幅は約7m）よりも広いことがわかりました。道路面は小石を敷き詰めています。道路面上には深い堀が掘られます。

堀――――調査区西端には大規模な堀があります。現存幅は約6mあり、復原すれば約7～9mにはなるでしょう。堀から戦国時代（16世紀）に属する遺物が出土していますが、開削時期は不明です。当時は都市民の自衛や防御のため、社寺までも含め京都の至る所に堀・土塋など‘構’（防御施設）をつくりますので、これらの堀は‘構’の一部ではないかと考えています。これらの堀で囲まれた宅地は約60m四方に復原できます。

池――――池は、この堀に囲まれた宅地内の南東部に位置しています。池は上・下面の2面検出し、上面の池からは16世紀、下面の池からは15世紀に属する遺物がそれぞれ出土しました。

現在、検出している池が下面の池です。北肩口は調査区外にあり未検出ですが、平面形はほぼ方形を呈すると考えています。検出面での規模は東西約11m・南北約9.5m・深さ約1.5mあり、現地表面から池底面までの深さは約4.5mに達します。池の肩口は南東部がほぼ垂直に近く、西部はなだらかに立ち上がっています。南東隅には滝口があります。滝口の下方にはL字状に板が埋め込まれていますが、滝口の造作に関わるものでしょう。滝口は正面の大石（鏡石）とそれに重なるような複数の石からなります。鏡石の両側面にはさらに上方に石が組まれていたとされ、当時はさらに高さのある滝であったと想定できます。底面から肩口にかけて拳大の礫を敷き詰め、長径30～80cmの石を配しています。また、北東部は池底面より一段高い陸部があります。陸部下層には径約5cmの空洞が約1.4m延長しており、空洞の突き当たった箇所には輸入青磁鉢が据えられています。この施設の機能は明らかではありません。この陸部上面には花崗岩の粗い砂が一面に敷かれています。

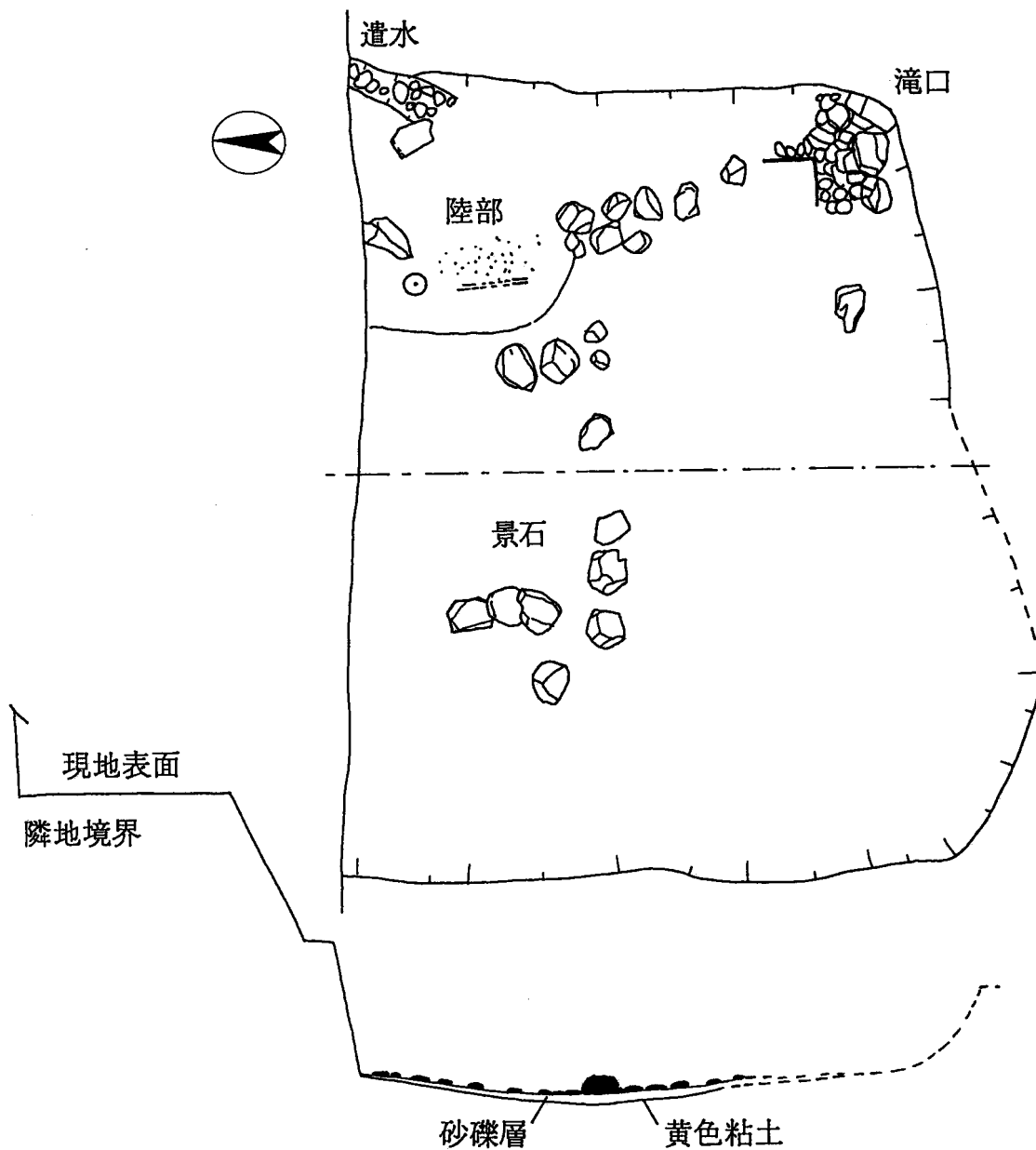
一方、池を構成する石は石材鑑定の結果、砂岩やチャートなどの丹波帯の石以外に数種の花崗岩が含まれることから高野川系のものであるとされています。また、緑色片岩が僅かに含まれていますが、この石は和歌山県の紀ノ川流域から運ばれてきたものでしょう。

池の水面は、底面の景石が浸る程度でしょう。池に満たされた水は、一見して周りの地山（砂礫層）から漏れると思われがちですが、この池の南側には室町時代の井戸があり、池の底面は井戸の底面の約40cm上に位置しますので、地下水位との関係から急激な漏れはなかったと考えています。

池からは中国から輸入された陶枕（とうきのまくら・山水画・磁州窯）が出土しました。日本ではこれまでに出土例のない貴重な遺物です。また、陸部に据えられた青磁鉢（竜泉窯）についてもこれほどの遺存状態を保ったものは少ないと思われます。

上面の池は、下面の池が20~30cm程泥で埋まった上につくられます。下面の池の北肩口を埋め立ててやや規模を縮小しています。肩口から底面まで拳大の石をぎっしり敷き詰めていましたが、大きな景石などを配することはありません。

北東には遣水と考えられる石を敷いた溝があります。下面の池は埋まり始めた段階で修築されており、溝はこの修築時に造られたと考えています。

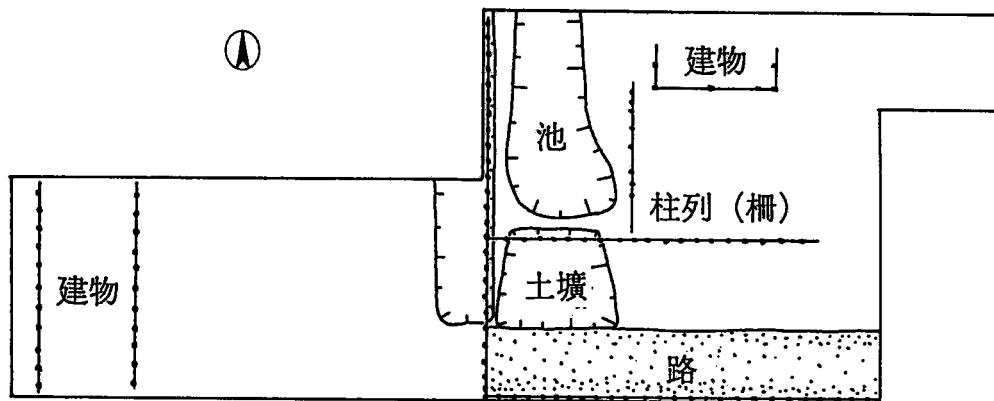


池の平面および断面模式図 (1/100)

4) 江戸時代前期にはこの場所に後藤庄三郎（江戸幕府の御金改役。金座の主宰者）が姉小路に面して屋敷を構え、金座をおいたとされます。

調査区は後藤家の敷地の南半部に該当します。敷地東端には池を構えています。西部には建物跡と考えられる柱穴列がありました。また、調査区の南東隅から中央部にかけて東西方向の路があります。東洞院通から後藤邸へ通じる路でしょう。中央部一帯にある多数の大規模な深い穴は、炭や灰を棄てた穴あるいは土を取った穴などです。これらの遺構からは当時の土器類や瓦類・金属器などと共に大量の木製品が出土しました。日本は‘木の文化’と表現されるように、あらゆるところに素材としての‘木’が使われていました。木製品は当時の文化を復原する上で重要な資料です。

時代が少し下がりますと、調査区南端や調査区中央に柱穴列がつけられます。これは区画を目的とした柵ないし塀と考えられます。



江戸時代の主要遺構概略図 (1/500)

5) 遺物概要 調査では、平安時代から江戸時代に至る遺物が遺物整理箱で約650箱出土しました。

※土器類――土師器・須恵器・二彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・陶磁器などで、中には中国から輸入された陶器の枕や金箔を貼った皿もあります。

※瓦類――軒瓦（軒先を飾る丸・平瓦）・金箔瓦（巴文の軒丸瓦に金箔を貼った瓦）・棧瓦などがあります。

※木製品――木簡（墨書された板）・遊技具（舟）・生活具（漆器碗・漆器盤・箸・釣瓶・曲物）などがあります。

※金属製品――鏡・煙管・飾り金具・鎧・銭貨・釘などがあります。

※石製品――石仏・石臼・五輪塔・砥石・人形などがあります。

※土製品――「源心」銘のある型押しの人形・伏見人形・犬などがあります。